

北海道情報大学学内報



(ドイツ郊外)

● 目 次 ●

学長就任にあたって 学長 大野公男…………… 2	海外訪問記…………… 6
学長辞任挨拶 前学長 三枝武男…………… 3	ドイツ旅行記…………… 7
退職にあたって…………… 4	卒業するにあたって…………… 8～9
人・CLOSE-UP Vol. 3…………… 5	編集後記…………… 10

発行・北海道情報大学
 〒069-8585 江別市西野幌59-2 TEL 011-385-4411 FAX 011-384-0134



—— 学長就任にあたって —— 十年一昔

学 長 ^{おお} ^の ^{きみ} ^お
大 野 公 男

北海道情報大学の開学は1989年(平成元年)4月1日のことであった。本年3月末日で満十年が経過したわけである。木下重教先生が、開学から9年間学長を勤められた。準備時代の約2年を含めて、本学の基本路線は木下先生によって敷かれたのである。三枝武男先生は9年間学部長として木下学長を補佐され、10年目には学長として本学の発展に尽力された。このたび三枝先生が辞任され、私が三代目の学長に任命された次第である。

私は前任校の定年の関係で1990年から本学に勤務する筈であったが、東京にある国立大学共同利用機関に、本学の了解を得て、さらに2年間勤務したため、本学への着任は1992年4月となった。開学以来3年、1年から4年まで、全学年が初めて揃った時期である。第一印象として、野幌の森林に囲まれて自然環境に恵まれていること、校舎が清潔で掃除が行き届いていること、そして学生諸君が見知らぬ私に挨拶をしてくれることなどが残っている。

木下先生は、“自由と調和”をモットーとして、本学の運営に当たられたという。この精神は、学生の教育、学生活動の指導、教授会・教員会議の運営にも反映されてきたと思われる。カリキュラムは、経営学科では情報処理を心得た経営の専門家の、情報学科では経営を知る情報の専門家の育成が、基本になっているようであった。3年、4年と2年間同一のゼミに属する少人数教育は大変良い考えと感心した(この点は間もなく2年目の教養ゼミが加わって、なお良くなった。)

衛星放送をも用いた、大学の通信教育が開始されたのは、1994年であり、日本で初めての出来事であった。これは本学の創立者である故松尾三郎理事長の先見性と実行力の産物である。すなわち、故松尾理事長は、本学の開学以前に、北は北海道から南は鹿児島にいたる全国9カ所に電子計算機

専門学校を設立し、通信衛星のチャンネルを使って、他の電子計算機専門学校も参加した、専門教育のネットワークを構築済みであった。そのネットワークが、従来の印刷授業、面接授業に加えられて、大学のいわゆるマルチメディア通信教育の本邦初演となったのである。私は本学に着任するまで、4年間で大学の学士と専門士の資格の両方が取得可能であることすら知らなかった。

さらに本学には大学院修士課程が、1996年に設置された。矢継ぎ早の学園の機能増大である。

そして今年3月までには、本学の経営情報学士の取得者は、通学課程において、7年間累計で経営学科795名、情報学科757名に達している。通信教育課程では、2年間で経営学科316名、情報学科1,306名が学士号を取得している。大学院では、同じ2年間で、計10名が経営情報学修士の学位を得て、社会に飛び立っていった。こうして本学が将来とも有為の人材を日本の社会に供給し続けていくことは疑いがなからう。

同じ1989年からの10年間を、視点を変えて眺めてみよう。1989年3月は未だバブルのはじける前で、東京証券取引所の平均株価は3万2,000円台であり、ニューヨーク株式市場のダウ工業平均が2,300ドル前後であった。10年経過した現在、前者は少し持ち直して、16,000円台を挟んで上下し、後者は10,000ドルを超えることのある水準に達している。日本では、景気回復の微動が感じられるとか下げが止まったかとの観測が行われているのに反し、米国の景気の拡大は9年目に入り、年率で6%代の高成長が維持されている。

こういう厳しい状況下の現在であるが、戦後のゼロから立ち上がった日本の社会の活力に期待したい。その一翼を北海道情報大学の供給し続ける人材が担っていくことを願って止まない。



学長辞任挨拶

前学長 さへぐさ 三 たけ 枝 お 武 男

学位記授与式も終り、平成10年度も11年3月末で無事終了しました。

この度私は都合で学長を辞任させて頂く事になりました。11年度からは理事・評議員として講義も続け、本学の発展のため陰の応援、協力をさせて頂く事になりましたので、今後共よろしく願います。

省りみますと私は終戦直後からの旧制都立工専、都立大学工学部、防衛大学の教職を経て昭和63年道情報大設立準備委員を1年、平成元年本学開学当初から経営情報学部長として9年間、学長として1年間、計11年間勤めさせて頂きました。通算50数年の長い教職生活を体験し、夫々の学校の創設に関与して参りました。

我国の教育は昭和20年の未曾有の終戦による混乱期から昭和24年の欧米式新学制度による教育体制への旧制から新制への移行による現体制が続き、昨今大きな教育変革が行われようとしております。高校以下のカリキュラムの全般的見直しから、大学教育のあり方、カリキュラムの見直し、大学院教育の充実という事で、少子化、経済情勢不況の続く中で新たな教育体制が展開されようとしております。

本学は故松尾三郎理事長の優れた先見性により約30年前開設の電子計算機専門学校全国10ヶ所をベースに平成元年開学し、昨年松尾記念館が完成し、校舎施設も徐々に形体を整えました。この度7期生及び大学院経営情報学研究科2期生とユニークなパインネットによる衛星通信教育を加えた9教育センターと9教育サブセンターを擁する通信教育部の2期生を高率の就職率で世に送り、10周年ということで一区切りついたといえましょう。

この間に教養課程の秀島光夫、澁谷寿一、河西章、村山登、大湯佐知子、福田都代各先生、経営

学科の上武健造、中野嘉弘、田中裕二、上野継義、小田中敏男、菊地平明、小林世治各先生、情報学科の斎藤収三、松本高士先生等多くの先生方が定年、転勤等の理由で退職され、また平成6年に遠藤一夫、山口啓一、小林敬爾各先生と平成9年に眞野脩先生、10年に大坂末富先生と有力な先生方を相次いで失うということで創設以来本学の発展に貢献して頂いた多くの先生方と別れる事になりました。

特に敬愛する偉大な本学創設者松尾三郎理事長、昨年のご逝去は惜しみても余りあります。

長年ご苦労頂いた木下重教元学長と共に歩んだ期間を含めた11年間、いろいろの事があり、懐かしい思い出として記憶に残りましょう。

私の学長在任中、共通一次入試センター試験導入等入試制度の改革、次期学部増設申請資料作成の推進、カリキュラム改正問題、国際交流センター利用問題、南京大学との協定を皮切りの国際交流問題、10年度自己点検・評価問題、教職課程導入問題、通信教育部関連問題等各重要問題と取組み教職員各位のご協力を得て夫々の推進をはかって参りました。

さらに同窓会を1期卒業生木村篤詩君に会長職を移し、また父母による後援会も亀谷隆氏に会長職を移し夫々本来のあり方に大学側から新体制に移行することも出来ました。

本学の発展にご尽力ご協力頂いた前述の先生方、退職職員や在職教職員の方々に深甚なる謝意を表すると共に益々のご健勝をお祈り致します。

長い間本当に有難うございました。

これからは松尾泰理事長、大野公男新学長のもと、教職員、在学生、卒業生等一体となって本学発展の為益々活躍されることを期待し学長退任の挨拶とさせて頂きます。



退職に当って

前経営学科教授 菊地 平明

平成元年の本学開学時から今日まで満10年間勤務して参りましたが、私の勤務人生46年間のうちこの10年間は、研究条件からも労働条件からも恵まれた10年間でした。これもひとえに学長先生はじめ教員のみなさんからの温かい御指導と今田事務局長はじめ職員のみなさんからの御協力のおかげと心から感謝申し上げる次第です。

私にとってこの10年間は、特に思い出に残るような事もなく平々凡々たる10年間でした。

強いて挙げるとすれば、平成3年頃の入試委員会と田中先生主催の教育研究会での入試問題についての考え方を申しのべたことが挙げられると思います。私は前任校北海学園北見大学での昭和60年前後数年間にわたる“定員割れ”寸前の急迫した入試状況を経験したことに鑑み、さらに加えて10年後以降の少子化傾向の必然化を展望して、入試問題についての考え方を述べたことが思い出される。

当時すでに北海学園大学では少子化対策として、道内外進学高校だけではなく準進学高校への高校訪問の方針を打出し実施していた。

本学においても、平成3年時点から教職員を含めこの入試対策・高校訪問の対応が必要ではないのかと感想を述べたことが思い出される。

学内生活では、ゼミが非常に活発で楽しかった。卒業祝賀会では3冊も花束をうけた。

通信教育は、平成8～9年46人にのぼる卒論指導があり、特に12月に46人全員の面接があり、しんどかったが、終ってみれば楽しかった。

村山先生が昨年退職されてからは、毎月20日午後6時狸小路ピヤホールで室木先生を加えて小宴を催し、毎月20日が心待ちになっている。最後に本学の益々の発展を祈り、教職員皆さんの益々の御健康を祈り、まずは退職の言葉の筆をおきたいと存じます。



最後のご奉公

前経営学科助教授 小林 世治

北海道情報大学を辞するに当たって、異例ではありますが、若干の「提言」をしたいと思います。本学の発展を願って、これを「最後のご奉公」とするものです。

1. 本学は開設以来、通信教育課程の増設、大学院の新設、そして今度は新学部の増設と、拡張路線を突っ走った感があります。しかし内的充実という点ではどうでしょう？ ハード面では、予算制約もあって必ずしも十分とは言えないでしょうが、余り論じたくありません。むしろソフト面、つまり教育のシステムと方法（さらには内容）について述べてみたいのです。
2. 教育内容を、「情報化」に限らず、この間の急速な現実の変化に即応させる、という「現代化」の課題がある点で意見の相違はないでしょうか。かつて、個々の科目自体の性格が変わらなければならない、いや基本こそ大事だという「論争」があった(?)ように記憶していますが、現在はどうでしょうか。私見では、「基本」の内容そのものが「現代化」すべき時期に来ている一方で、学生全般の「学力低下」が生じているという矛盾があるように思われます。
3. 本学の場合、導入部を「現代化」するが、中身は基礎学習を充実・強化させるのが、相応し

いやり方だと思います。そのための教育手段として注目されるのはマルチメディアです。これまで情報教育研究所で開発された最先端ソフトから、専門学校で蓄積されたノウハウまで、電子開発学園が有する「共通資産」は大きい。新学部ともどもこれらを活用して、教育システム全体の「現代化」を考えるべきでしょう。

4. 「基本」の内容をわかりやすく教えることは、労多くして益少ないことを実感しています。むしろ学生に目的意識をもたせて、その自己学習を支援する方が望ましいのではないのでしょうか。チーム制をもとにマルチメディアを使った作業体験をするなかで、社会や経営の現実に関心を向けさせることから始めてはどうでしょうか(3を具体化する意味で)。「基礎学習」はそうした実習をベースにして、教授内容の思い切った取捨選択をしなければならないと思います。

教育経験が少ない私のこうした「提案」に対して、恐らく反発を覚える先生もおられるでしょう。しかし、そこは「自由の学園」である北海道情報大学の良き伝統、去る者の「言いつばなし」をご寛恕くださいませ。最後になりましたが、ほんとうに長い間、ありがとうございました。

海外訪問記

~ Family is everything
for me ~

教養課程助教授 増田辰良

昨年度4月1日から10月31日という短い期間ではありましたが、英国のWarwick大学経済学部で客員教授として研究活動をする機会を得ました。研修にあたって事務処理をしていただいた内外の担当者には心よりお礼申し上げます。滞英生活の一部を感想として記します。研修成果の一部は本学の『紀要』に投稿する予定です。何かの役に立てば一層嬉しいですが。

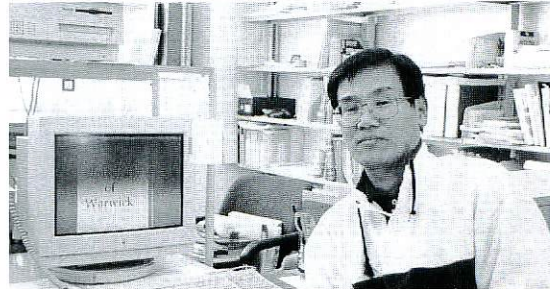
研修の目的は日英の競争政策の比較制度分析をするための英国に関する基礎データを収集することでした。しかし、私にとってもっと重要なことは自分自身を“深く悩み込ませる状況に置く”ことでしたので単身での渡航を計画していたのですが、招聘状をくれた教授から家族で来てくれという連絡を受けたため、結局家族とともに滞英生活をしてきました。そのため私にとってより重要な後者の“悩み度”は半減してしまいました。

私の荷物はJournalへの投稿論文2本と筆記具だけであり、家族には「お父さんの荷物は学会発表にでかけるときと同じだね!」と言われる始末でした。服装は皆さんご存じの普段着(ジャージの上にウインドブレカー)でした。さすがに海外生活に慣れた女房からは入国審査のときに疑われるよ、と言われました。案の定、Are you a professor? Really? と微笑まれましたが、OK!!

*キャンパスのこと

Warwick大学はTimesの調査によれば、英国・ヨーロッパの大学において総合ランキング4位に位置しており、Oxford大学を追い越す勢いで発展中の大学です。学生数は約2万人で、その出身国はインド、香港、韓国等を中心にアジア系が多いようです。研究者たちは著名なJournalのGeneral Editorをしている方が多いのでも有名です。留学生で“食っている大学”だけあって、広大なキャンパス内には学生のための宿泊施設が十分すぎるくらい充実しています。日本に居ては想像もできませんがキャンパス内には遊戯施設(ゲームコーナー)やパブ(5店)もあります。さらに朝8時から夜10時まで利用できる図書館やフットボール場、クリケット場、陸上競技場や温水プールもあり、当然すべて市民にも解放されています。また英国でも屈指のThe Art Centerがあり、地域のシンボルにもなっており演劇や映画等あらゆる芸術文化活動が展開されています。今日、当大学は世界中から「大学づくり」の見本として評価されているようです。

あたりまえのことですが、学生や研究者も実によく勉強をしています。研究者について言えば、勉強をして論文を専門のJournalへ掲載しなければまず昇進は



ありませんし、ことによれば職を失うことにもなりかねません。そしてもっと本質的なことは専門の論文が書けなければ学生の成績や他の研究者の業績を評価する能力が無いと判断されているからです。

*リーダーシップのこと

これは帰国してから一層強い印象を受けているのですが、例えば、日英の首相の公的発言を比較してみると、実にリーダーシップの資質に歴然とした差を感じます。英国のブレア首相は弁護士をしていたこともあってか相手を説得するようにゆっくりはっきりした英語で手ぶり身ぶりを交えながらかつ“表情豊か”に答弁しています。一方、我が国の首相は景気対策として「減税をします。公共投資をします。」としゃべってもうつむき加減で表情一つ変えず「これで景気は上向くものと確信します。」と原稿を棒読みするだけです。明るい未来を予測可能にするための公的発言が無表情のままおこなわれても聞く側は疑心暗鬼になるばかりです。これでは景気もよくなるはずがありません。かつて日本でもリーダーシップを欲しがらる人間には善かれ悪しかれ“自己の信念や野心”があったようですが今は単なるコーディネータでしかないようです。

いま、日本が抱える大きな問題の一つに「人づくり」という課題がありますが、その前にどんな小さな組織であれリーダーシップをもつ人間の“脳力”や“判断力”の向上自体が問われている時代だということを実感しています。まだまだ、外国から学ばなければならぬことは多いようです。

悲しいかな帰国して感傷に浸る余裕を与えてくれないのがこの国に住む者の宿命です。予定していた仕事はほぼ終えて帰国しましたが、やはり研修期間が短いという不完全燃焼の思いも残っています。滞英中は女房の寛容な心と子供たちの天真爛漫さに支えられました。改めて“Family is everything for me”を想う心境です。



経営学科3年 中村 祐美

私は98年の8月2日から10日間、ドイツとオーストリアへ行ってきました。私の将来の夢は、ドイツへ留学して、ルフトハンザ航空に入る事です。そこで今回の旅行の目的は大学を見てくる事と観光、そして、できるだけ沢山ドイツ語を話す事を目標に行ってきました。この旅行は友達と2人だけで行った個人旅行でしたので、とにかく準備が大変でした。4月位から計画を立てていましたが、8月までぎりぎり間に合ったという感じで旅行会社の大変さが分かりました。何処へ行きたいと思っても、個人旅行なので交通手段を考えなければなりません。一番正確なのが汽車なので、とにかく汽車の時刻と乗り換えを調べました。そして8月2日、ついに出発の日がきました。飛行機はKLMで行きました。私達の初めの目的地はオーストリアのインスブルック。グランドホステスいきなりこの目的地、初めて見るのですが何と読むんですかと聞かれ、誰も行く人いないのかと、友達と話していたら、予想通りアムステルダムからのりかえた飛行機は20人位しか乗っていないプロペラ機で、墜落するんじゃないかと思うくらい揺れました。着いたのは、夜の10時頃だったので、すぐに寝ましたが、飛行機がすごく揺れたせいか、体調が悪くてインスブルックは、あまり観光できませんでした。次の目的地はザルツブルグ。駅へ行き、窓口で目的地や汽車の種類などを言い切符を買うことができました。駅員さんはやさしくて、私のドイツ語も通じたので、とてもうれしかったです。ザルツブルグは観光客が沢山いて英語、独、仏、伊語がそこら中から聞こえてくる街でした。次は予定ではミュンヘンに行くつもりでしたが、2~3日後に行く予定だったチュービンゲンという所へ行きました。チュービンゲンはザルツブルグから4時間位でシュトゥットガルトから40分位

の所です。ここには、私が行きたいチュービンゲン大学があります。この大学はドイツで2番目に古い大学でケプラーやヘーゲルが出た大学です。日本語学科があるくらい大きな所で、街のあちこちに学部が分かれていて大学の中に街があるというような所です。ここには4日間いました。江別と同じ位の人口10万人の市なので、ほとんど暮らしていける程、知りつくしました。スーパーやドラッグストアなど個人旅行でなければいけないような所にも行き、色々な経験ができました。料理の事を書いていませんでしたが、朝はかたいパンとチーズとハム、昼はスタンドや喫茶店で軽くとり夜はホテルかレストランで、くどい肉料理か魚料理を食べていました。私もかなりの大食いですが、ドイツ人の食欲には驚きました。そして、何でもフォークとナイフを使うので驚きました。フライドチキンもナイフとフォークを使ってましたが私達はかまわず手で食べていたので野蛮人と思われていたかもしれません。

今回の旅行はかなりの時間をかけて計画を立てましたが、予定していたミュンヘンやローテンブルクにはいかず、行く予定ではなかったマインツやハイデルベルクに行ってきました。しかし、どの街も良い所だったので行き当たりばったりの個人旅行の良さだと思います。今回の旅行で感じた事は、おじさんやおばさんより、若い人の方が冷たいなと思いました。バスの運転手のおじさんやホテルのおばちゃんとは色々話しができました。若い人とは汽車のコンパートメントで一緒だった時しか話す機会がなかったのでそう感じたのかもかもしれません。ドイツのフランクフルトは昼でもかなり危険な所だと思いましたがそれ以外は女2人でも安心して歩けるヨーロッパの中でも安全な国だと思うので、皆さんも是非、行ってみて下さい。あと、アジアでもアメリカでも旅行は沢山良い経験ができるので、長い休みがある学生時代に行くことをお勧めします。



* 卒業するにあたって *

～平成10年度(7期生)～

〔中村直美〕

学生生活で楽しかったことは、やっぱり旅行でした。

友達4人で行った「沖縄」は忘れられない思い出です。

＼(…)／どんな思い出ができたのかな？

〔秋山洋明〕

「学祭やらない？」と、ほとんど名前も知らなく「あだ名」で呼んでいた友人にかけられた言葉がきっかけでした。それから、4年間やめるにやめられず、大学のほぼ全ての行事を運営しました。

やっていなければ、どんな大学生活だったのだろう！

＼(…)／秋山君には、いろいろ協力してもらったネ。でも大学で頑張った経験はきっと大きな財産になると思うよ！

〔中村達也〕

この4年間で、私の心の中に一番強く残ったことは、就職活動でした。

試験や面接のことで何度も頭を悩ませましたが、最後まで諦めることなく続けた結果、自分の希望通りの職業に就くことができました。

後輩のみなさんも途中で諦めることは絶対にしないで下さい。最後までやり遂げれば必ずいい結果につながります。

＼(…)／本当にその通りだネ！ たまには大学に遊びに来て下さい！

〔高本英司〕

4年生の皆さん。こんな時代に就職活動なんて。ちょうど今頃(2月)、私も就職活動を始めていたことが人ごとのように思い出されます。偉そうに少しアドバイスをさせていただくと、今、世の中にはたくさんの情報があふれています。

その中から自分に重要な情報をチョイスする能力が現代人には必要なのだそうです。

ですから、皆さんも「うそ」の情報には気をつけて下さい。

応援してます。

＼(…)／「ハンサム」で「クール」な高本君。

早い時期に就職が決まってよかったネ！

〔山口征剛〕

無事、卒業を迎えた今、就職活動を振り返ってみて、時間の経過が早かったと思います。

自分自身の「足」を使い会社訪問をしたり就職課の方々に相談にのっていただいたりと、めまぐるしく時間が過ぎていきました。

始めは辛いと思っていましたが、何度か経験するうちに今のままではダメだと思い、先を見る気持ちで取り組むようになりました。

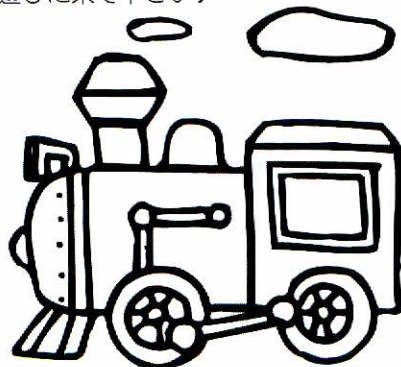
その結果なんとか内定をもらうことができました。

これも就職課の方々のお陰だと感謝しております。

これから就職活動をされる方は、是非就職課を利用して下さい。

＼(…)／いつも前向きで、向上心のある山口君。

会社に入ってもそのバイタリティを大切に頑張ってください！



《吉田光良》

どーも、いやいや皆さんどーも。演劇集団「なたく」の吉田です。僕の就職活動といえば東京まで出てみたり、札幌で探したり……もうへロへロになって、しかも7月には劇団に入りながらも就職活動を続け、そんな中、郵便受けに投函されていたDMの会社に応募したところ、合格してしまいました。これから活動にはいる皆さんも色々な事、やってみて下さい。努力して疲れたら、遊びましょ。運も向いてくるはずですよ。
 \ (…)/ 吉田君は、この4年間でいろんな事を経験して、他の学生とは一味違う大学生活を送ったのではないのでしょうか？

《西田英子》

全体的に楽しかったです。講義の空き時間に外へ出かけたり、焼き肉をしたりしたのが良かったです。実はさぼったりもしてました。すべていい思い出です。ウフ！
 \ (…)/ 西田さんと言えば、常に大学の行事(体育祭・大学祭等)に秋山君同様、よく頑張ってくれましたネ。本当にご苦労様でした。

《中村英史》

僕の4年間は「野球」中心でした。ずっとやってきた野球を大学でもやろうと思い、入学してすぐ野球部に入部しました。試合に負けて悔しい思いをしたり、部活内でのトラブルがあつたり、様々な出来事がありましたが、今、振り返ると本当に充実した4年間でした。これからも、野球は続けたいと思います。
 \ (…)/ 卒業しても暇があつたら、野球部に顔を出してあげて下さい。
 就職課にもよって下さい！ お土産も忘れずに！

社会へ飛び立つ皆さん！

大学での思い出を胸に

是非頑張ってください。

心から応援しております。



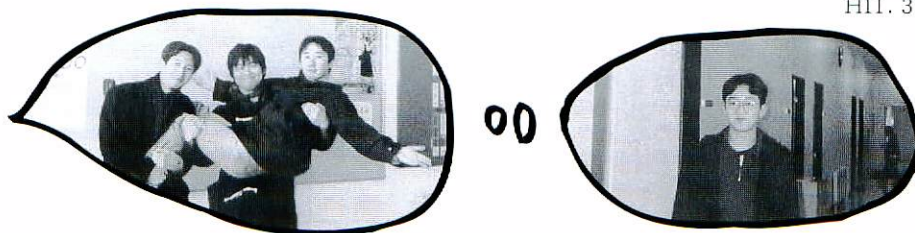
編集 就職課 桑 川

■ 平成10年度就職者データ ■

〈業種別就職割合〉

	1期生 H5/3	2期生 H6/3	3期生 H7/3	4期生 H8/3	5期生 H9/3	6期生 H10/3
サービス業	4.7%	23.4%	15.1%	11.2%	9.7%	11.1%
情報産業	44.9%	2.3%	12.6%	14.4%	25.0%	42.3%
卸・小売・飲食	26.2%	46.9%	33.5%	43.4%	39.8%	26.4%
製造業	9.8%	4.6%	14.8%	13.3%	5.1%	4.3%
建設業	3.3%	6.3%	4.7%	6.1%	6.2%	4.3%
運輸・通信業	2.3%	2.8%	4.2%	3.3%	4.0%	1.8%
金融・保険業	1.4%	8.6%	6.8%	3.3%	2.8%	3.1%
公務員	5.1%	3.4%	7.3%	2.2%	5.1%	4.9%
その他	2.3%	1.7%	1.0%	2.8%	2.3%	1.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

H11.3.31現在



◆◆ 教職員の動向 ◆◆

☆ 大 学 ☆

- ◇教員人事◇
 3月31日付退職
 学 長 三枝 武男
 教 授 金塚 高次
 “ 西辻 昭
 “ 佐久間安世
 特任教授 菊地 平明
 助 教 授 小林 世治
 4月1日付採用
 講 師 坂本 英樹
 特任教授 金塚 高次
 “ 西辻 昭
 “ 佐久間安世
 特任講師 三枝 武男
 4月1日付昇任
 教 授 古 室 俊行
 助 教 授 廣 奥 暢
 “ 高 井 那美
 “ チャールズ・マクラティ
 4月1日付管理職
 学 長 大野 公男
 学 部 長 久野 光朗
 研究科長 前田 隆
 通信教育部長 佐々木 正文
 学生部長 長 井 敏行
 教養課程主任 立花 峰夫
 経営学科主任 浜 淵 久志
 情報学科主任 中岡 快二郎

◇事務職員人事◇

- 3月31日付退職
 会計課長 中村 有紀
 通信教育部 事務長 稲上 保彦
 4月1日採用
 会 計 課 武田美由紀
 4月1日付人事異動
 事務局長兼会計課長 今田 末吉
 通信教育部 事務長 加藤 那雄
 教務課長兼大学院課長 寺川 信也
 教務課教務係長兼
 大学院課教務係長 高田かおり
 教 務 課 中村 正志

◆◆ 1月～3月主要行事 ◆◆

☆ 大 学 ☆

- 1月4日(月) 新年交礼会
 22日(金) 教授会
 2月7日(日) 一期入学試験
 12日(金) 教授会
 3月5日(金) 教授会
 9日(火) 二期入学試験
 12日(金) 教授会
 19日(金) 学位記授与式
 (経営学科97名、情報学科108名、
 研究科7名)
 ☆ 通信教育部 ☆
 (後期地方スクーリング)
 1月7日(木) 後期印刷授業科目試験
 ～11日(月) 後期地方スクーリング(名古屋)
 15日(金) 後期地方スクーリング(名古屋)
 ～17日(日) 第4回入学選考
 22日(金) 第4回入学選考
 1月22日(金) 地方スクーリング(新潟)
 ～24日(日) 地方スクーリング(広島)
 29日(金) 地方スクーリング(広島)
 ～31日(日) 地方スクーリング(ニセコ)
 2月14日(日) 地方スクーリング(ニセコ)
 ～17日(水) 第5回入学選考
 19日(金) 第6回入学選考
 3月12日(金) 平成10年度学位記授与式
 23日(火) (卒業生985名)
 29日(月) 第7回入学選考

◆◆ 広報活動 ◆◆

- テレビCM(STV) 1月1日～15日
 2月15日～28日
 広告掲出(道新) 1月4回(一般1期入試)
 2月1回(通信教育部
 正科生A募集)
 ポスター掲出(地下鉄) 1月14日～22日
 (一般1期入試及び
 大学院2次募集)
 高校訪問(札幌近郊) 1月18日～22日
 2月8日～15日
 校内ガイダンス(秋田商業高校) 2月10日

編 集 後 記

弥生3月も過ぎ、心はずむ4月を迎えるとは到底思えない、天気予報の雪マーク。「今朝の気温、マイナス…」とのお天気お姉さんの声から始まる朝に、うんざり気味の毎日です。いまだ積もる、車の上の雪を降ろしながら、「北海道の四季って、本当は、春夏秋冬じゃなく、春、秋、冬、真冬じゃないかしら」などと、真剣に思っています。雪の向こうに見える、桜を待ちながら、希望の新入生を迎えるの新年度はすでに、準備万端、発車オーライです!!
 春は新たな出会いと共に、お別れの季節。今号の『ななかまど』では、3月で本学を去られる先生方にご挨拶を頂きましたが、同じく退職される職員の方も合わせ、「大変お世話になりました」との感謝の気持ちと共に、「皆様のこれからの桜満開、春爛漫の人生を、心よりお祈りしております」と願う、今日このごろです。(〇)

北海道情報大学学内報

「ななかまど」第12号

発行日 平成11年4月1日
 発 行 北海道情報大学
 編 集 学内報編集委員会